

表紙

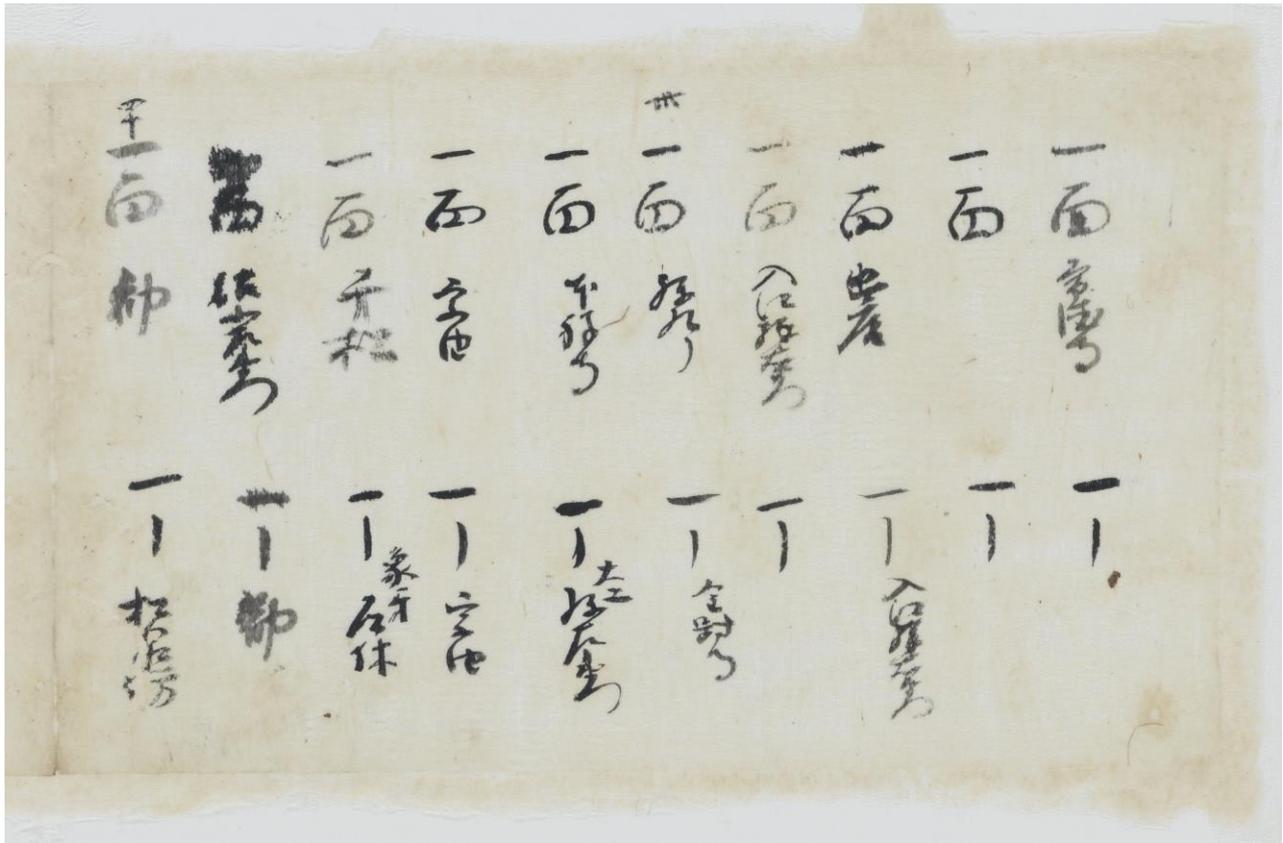
将碁馬日記（しょうぎこまにつき）

「将碁馬日記」には天正十八年てんしょうから慶長七年けいちょう（1590～1602）まで、各年に水無瀬兼成が依頼主に応じて制作した駒ゆずの譲り渡し先が書かれています。

「日記」によると、制作された将碁は現在も一般に指されている「小将碁（碁）」のほか「中将碁」や「大将碁」、「大々将碁」、「摩訶大々将碁」で、徳川家康には53組の駒が納められていることが分かります。

「日記」の中には、依頼主として後陽成天皇ごようぜいや正親町上皇おおぎまち、豊臣秀次ひでつぐや徳川家康など当時の天皇や公家、武将などが次々と登場し、僧侶・神職しんしよくや商人、大工棟梁とうりょうたちの名前なども見られます。このようなことから、依頼主が身分的に、また、地域的にも広範囲な層にわたっていた事がうかがわれます。

水無瀬駒に関する重要な史料の一つで、平成21年に町指定文化財第1号に指定した「水無瀬駒 関連資料」の追加として、平成23年4月1日に町指定となりました。



制作目録

水無瀬駒の譲渡先は・・・

「日記」の中でも注目されるのは、^{あしかがよしあき}足利義昭（室町幕府 15 代将軍）が兼成に将棋駒の制作を依頼し、その駒とみられるものが、平成 20 年に福井県で発見されたことです。

「日記」には^{けいちよう}慶長三年（1598）、兼成 が八十五歳の年の「小将碁」の項に「一、**(面)**象牙 **道休**」とあり、この「道休」は、^{どうきゆう}出家した義昭のことで、兼成が義昭から象牙の^{ぞうげ}「小将碁」一面を依頼され、納めたことを示します。

福井県で発見された駒の^{ぎよくしよう}「玉将」の駒尻には^{こまじり}兼成筆とみられる「八十五才」の銘があり、「日記」の記載に対応する実物である可能性が高く、記載の事実性を証明するものとして注目されました。